

## 教師と子どもの関係づくり

例えば、『掃除をきちんとしないさい』と言うと、「先生、私たちだけが使っているわけでもないトイレを、なぜ私たちだけが掃除しなくちゃいけないのですか」と訊ねてきます。

しかも、大まじめにです。

十年前にも、そう言うことを訊ねてくる子はいました。

しかし、それは「分かっていて」訊ねていました。

ところが今の子どもたちは違います。

真剣に、自分たちだけが掃除するというのはおかしい、と考えているのです。

そこで、教師には次の三つのことが必要となります。

前提をつくるという構え

説得の技術

振り返りの技術

。前提がない以上、それはつくらなければならないのです。

教職5年目を過ぎたあたりから、それまで出なかったような質問を私は子どもから受けるようになりました。

いえ、正確には子どもからも親からもです。

それは、私がずっと取り組んできた「日記指導」と「暗唱指導」についてでした。

つまり、「先生、なぜ日記を書かなければいけないのですか」「先生、日記という性格のものに、なぜ指導するのですか」や「先生、詩の暗唱はいったい何の意味があるのですか」「先生、暗唱を子どもに強制するのはやめてください」というものでした。

私は、こうした質問(意見)をいただくこと自体にたいへん驚きましたが、説明が足りなかったと思い、口頭で子どもたちに説明をし、学級通信にもねらいと意図を書くことにしました。

つまり、これをすればこのような効果があるよ、だから君たちはやるべきなんだと言う前提をつくるわけです。

。どう説得すればもっとも効果があるのかを教師は知っていなければいけません。

しかし、言っておきますが、このことに法則やマニュアルはないのです。

この技術は、むしろその教師固有の技術なのです。

例えば、私のような人間が、子どもを怒鳴り散らしたりしても反発が返ってくるだけで、何も効果がないことを私はよく知っています。

昔、中学校のバレーの先生でたいへん実力のある方がいらっしゃいました。

練習中子どもたちを厳しく指導し、コート内で怒鳴るようなこともありました。

しかし、子どもたちはたいへんその先生を信頼していましたし、何より実力がついていました。

私は、そうした指導法にあこがれをもちますが、私にはできないことだなあ、と思うのです。

私に合った指導は、落ち着いた声で切々と訴え、最後に「君らしくなかったな」「次に期待してるよ」と江原啓之のように言って肩に手を置くことなのです。

教師は、自分のキャラクターを分析して、そのもっとも効果的な指導法を編み出すべきです。

そんな、打算的と思うかもしれませんが、それがプロとしての努力だと私は思います。芸能人を見ていると、いつもそう思います。

例えば、和田アキ子。あの方は、実に自分の見せ方をよく知っていると思います。

普段はほとんど男キャラなのに、何かの拍子にホロッと涙を流してみせる。

それが、チャーミングに人の目に映ることをよく知っている。

また、細木数子なんていうのも、実にうまく演出されていると私は思います。

説得の技術とは、まず自己分析によって成るものなのです。

。振り返りの技術。

教師が、ある活動をやる必要があるという前提をつくり、説得し、活動させたら必ず振り返らせる必要があります。

例えば、トイレ掃除をさせたあと、子どもたちに聞いてみるわけです。

『どうだった？』「先生、こんなにきれいになったよ、俺たちってスゴイよね」

『先生もスゴイと思うよ。最初嫌だなあって思っていたけど、やってみるとどう？』

「すごい、いい気持ち！」

『そうだね』

先生の言うことをきいてやってみたら、うまくいったよということを振り返りによって引き出し、脳に印象づけるのです。

そうすることが、未来に向けての学習につながっていくわけです。

後出しじゃんけんしない

『大辞泉』で「契約」を引いてみます。  
すると次のように説明がされています。

二人以上の当事者の意思表示の合致によって成立する法律行為。

私は、現在学級経営に於いてこの契約がとても重要であるところを今考えています。  
ひと昔前なら、学級経営に於いて、教師と子どもとの契約は不要でした。  
つまり、教師は絶対的な基準であって、しかも子どもに対して常に指導するという前提がありました。

だから、何らかの意思表示による合致など必要ではなく、あるのは強制でした。  
ところが、最近その基準も前提もゆるくなってきているのです。(と実感しています)  
特に、こんな場面に出会うとそれを強く感じます。

ノート提出を求めます。

出されたノートの文字が、乱れています。

『もう少しきれいに書いてらっしゃい』

「だって、先生、そんなこと言わなかったじゃない」

私は、これ相当典型的な場面だと思います。

だから、4 / 7の最初の授業のときに言っておかなきゃいけないわけですよ。

これから、1年に千時間くらい勉強する時間があります。

この時間のなかで、先生はみんなを今の2倍も3倍も賢くしたいと思っています。

でも、先生だけじゃなくて、みんなも賢く成りたいと思わなければ、賢くはなれないね。

みんなの中で、先生、ぼくどうでも良いよ。大して賢くなりたくもないという人いるかな(ここは相当眼光を鋭くして問う)

(いなければにっこり笑って) ああよかった、それなら、そのために先生はいくつか君たちにこうしなさいということがあがあるけれど、それにも従ってもらうぞ。

いいね？

まずは、ノートのことだけど.....

こういう契約をしておくわけです。

このことをやらずにいると、「先生、そんなこと言わなかったじゃない」と後出しジャンケンを責められるわけです。